

基調講演・公開審査会記録

日時：2023年5月27日 13:00~16:30

会場：JIA 館1階 建築家クラブ（Zoom 併用）

参加人数：18名

コンペ 登録者数：11組（11名）、出展数：8作品、発表者数：7組（7名）

記録者：千薬大学 漆原東子

【概要】

JIA 城東地域会主催による第4回「なりたて建築士のための設計コンペ 《事務所》」の基調講演及び公開審査会が行われました。「須賀川市民交流センター tette」で2020年 JIA 優秀建築賞・日本建築学会作品選奨他を受賞された、建築家 畝森泰行氏に審査員長を依頼するとともに、基調講演として『私の建築士像』をテーマに“いま私が考える建築士像及びその建築について”お話しいただきました。また、公開審査会では、出展者にオンラインで発表していただき質疑応答を踏まえ、最優秀賞1点、優秀賞1点、奨励賞2点が決定いたしました。

【基調講演内容】

畝森泰行氏『私の建築士像』

（講演）

自分の働く事務所について。

同世代の teco と事務所をシェアしており、コロナ禍で周りの職場ではオンライン化が進む中、自身は皆が一緒に集まる可能性を改めて考えた。5階建ての建物で、地域の様々な人と関わりを持ち、外部環境に触れながら作業をすることもある。

建築士は、法規的な意味では設計をし、工事監理をする人のことである。しかし、一級建築士の免許をとった自分の場合は他にも、コンペに参加あるいは審査したり、大学で教えたり、多岐に渡る活動をしている。例えば百姓は、季節や人によって百の、沢山の職を手を持っていると捉えることができるが、建築士も百姓にとっても近い存在であり、またそうなりつつあるように思う。また、山林地域などに住む人々のように円環する時間の世界の中に生きるということは、自然環境や社会状況に寄り添いながら建築を考えるということであり、百姓のように社会の中で向き合っていくということは非常に大事であり、建築だけにとどまらずそのような考え方は今後必要になっていくだろう。

自邸「Houses」に関して。

1つの敷地に、妹家族と路地空間を挟んで住居を設計し、2住居とも細長い形状で一本分の道を空けて並んでいる。自分1人だけで住むのではなく、自然を感じながら、他者と住む充実感、誰かと一緒に暮らしている、ということが豊かさにつながる。既存建物を改修+新築した「父子の家」に関して。更地にして建て直すのではなく既存の架構を残しながら、新しくできないか。前につくった人の「合理性」を引き受けながら、混ざり合う建築を作ることで、歴史を引き継ぐ。

建物がそれ単体ではなくさまざまな使われ方をし、いろいろな自然環境、社会環境と混ざりながら一つの建築ができるといい。これからの建築士像として、静的なものではなくて他のものと協働してみたり、動的に、百姓のようにいろいろなものつながりながら建築を考えていけるのが理想である。

(質疑応答より)

1人には限界があり、他者と協働することに可能性を感じる。場所をシェアする上では、お互いを尊重し、お互いの場所を維持管理することが大事である。自分の考えを伝えつつ、他者がそれに対してどう考えているかを聞くことを欠かさずまた否定しないことを心がけている。それを受け入れた上で次の案を考えるという進め方をしている。

自立共生について、それぞれが自立的に意見を持った上でコミュニケーションを取ることで新しい個性が生まれてくるだろう。対話が大事である。

既存建築物の改築に関して、どこから新しくするべきかなど、明確な線引きはできない。施主と話し合ったり歴史を考慮したりすることで決めていくのが理想的である。

【公開審査会】

① 作品紹介

1) 北口貴是『OFFICE CONNECTED TO THE SKY』

事務所空間が公園要素を段階的に吸収していくことで、事務所空間と公園が一体的な敷地空間となることを目指す。

2) 上塘耀己『形容詞のあるオフィス』

働き方の変化に対して必要な多様な種類のオフィス空間がグラデーショナルに変化していくように計画する。

3) 板谷優志『商店街のオフィス』

大企業を部署ごとに解体し、シャッター商店街の店々とマッチングさせていき、丸ごと変えていくことで、街の人に開かれた新しいオフィス空間を提案する。

4) 中安翔太『変動する立体グリッドオフィス』

テナントの入れ替わりと共に、気軽に床や階段などを変動させ空間を変化させることが可能となる可変的なオフィスを提案する。

5) 中村修悟『シェアオフィス×水族館』(データ提出のみ)

シェアオフィスにおいて、最重要項目を“集客性”と考え、新たな付加価値として水族館としての機能を加えた屋上庭園の代替として計画する。

6) 前田諒『余地/選択の再考』

余地を与えることで、さまざまな働き手が職場を自由に選択し、建物の中からも外からも風景が都度変化していく「働く街の公民館」を提案する。

7) 石河莉夏子『じゃばらビル』

リモートワークが主流になる世の中で、出社したくなるような、新鮮な空間体験ができる一冊のじゃばら本のようなオフィスビルを提案する。

8) 水野名央美『じぐそーぱずる』(データ提出のみ)

設計製図試験は基本的にジグソーパズルのようなもので、建築設計においては周辺環境のペースと合わせる事が大切であると考え計画する。

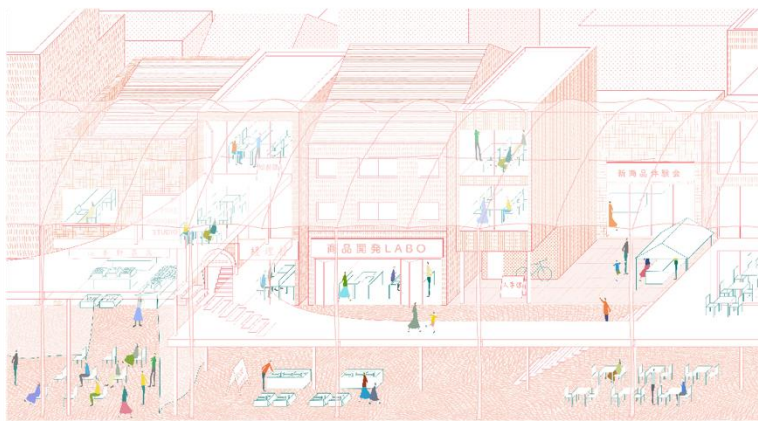
② 講評・受賞作品

〈全体講評〉

これからの働き方に対して建築としてどう考えるか。今まで何が入っても良いようにとされた従来型のオフィスに対し、これからは具体的な場所や対象を設定して、より個性を考えていくとそこから新しい可能性が生まれるのではないか。今回は抽象的な、どこでもありうるようなものとして提案した作品が多かったが、そこからより具体的に掘り下げていくとより面白い案になるように思われる。

〈最優秀賞(1点)〉

3) 板谷優志『商店街のオフィス』



商店街のオフィス

「商店街」にならなくても「アーケード」が建ち並ぶ「1フロア」のオフィスビル。従来のオフィスビルとは異なり、1フロアごとに「アーケード」が建ち並ぶ。この「アーケード」が、オフィスビルとしての「顔」になる。また、この「アーケード」が、オフィスビルとしての「顔」になる。また、この「アーケード」が、オフィスビルとしての「顔」になる。

1 図面にひかれる要素

1	2	3	4
ARCADE	OFFICE	STAIR	ELEVATOR

1 新しい提案のアーケードです

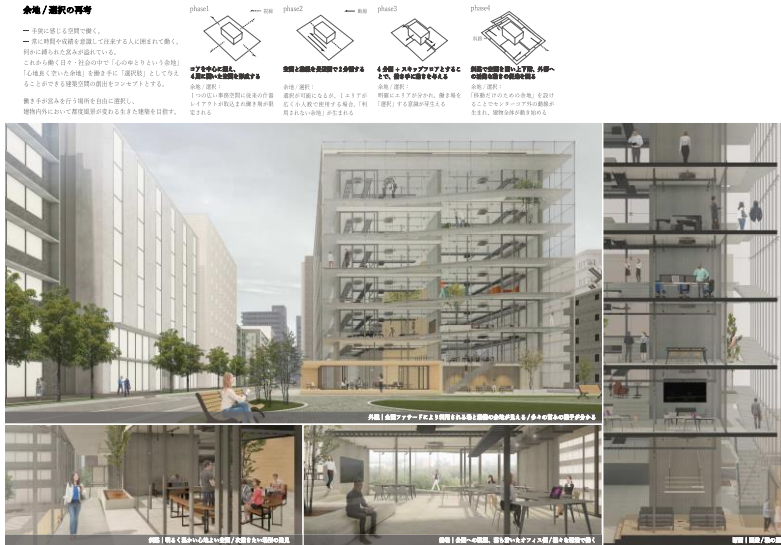
「商店街」にならなくても「アーケード」が建ち並ぶ「1フロア」のオフィスビル。従来のオフィスビルとは異なり、1フロアごとに「アーケード」が建ち並ぶ。この「アーケード」が、オフィスビルとしての「顔」になる。また、この「アーケード」が、オフィスビルとしての「顔」になる。また、この「アーケード」が、オフィスビルとしての「顔」になる。

選出理由

従来の企業のオフィスを解体したところや、日本の「商店街」の形式への信頼が感じられるところが評価につながった。大企業と、小企業や個人企業などが混ざる、隣り合うという規模によらない新しい可能性を感じられたところも高評価となった。

〈優秀賞(1点)〉

6) 前田諒『余地/選択の再考』

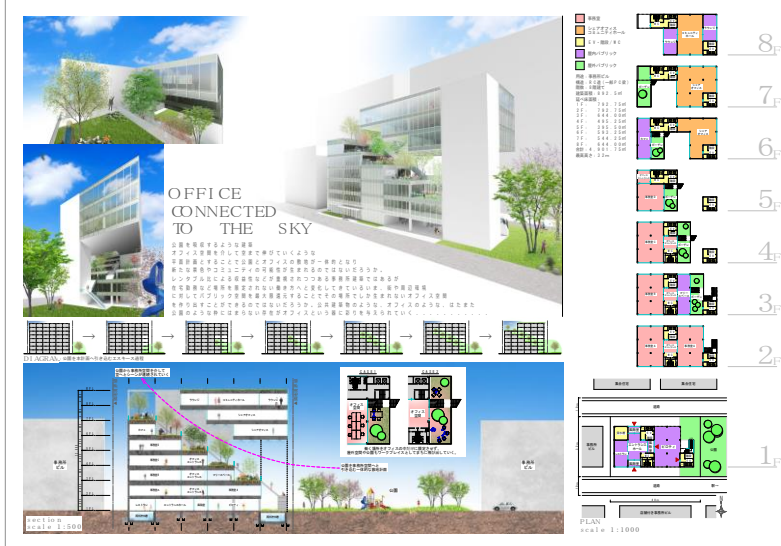


選出理由

オフィスらしいパースにしない方がより面白かったかもしれないが、街の公民館であったり、街路との関わり方や、オフィスビル自体の新しい形の提案が魅力的であった。

〈奨励賞(2点)〉

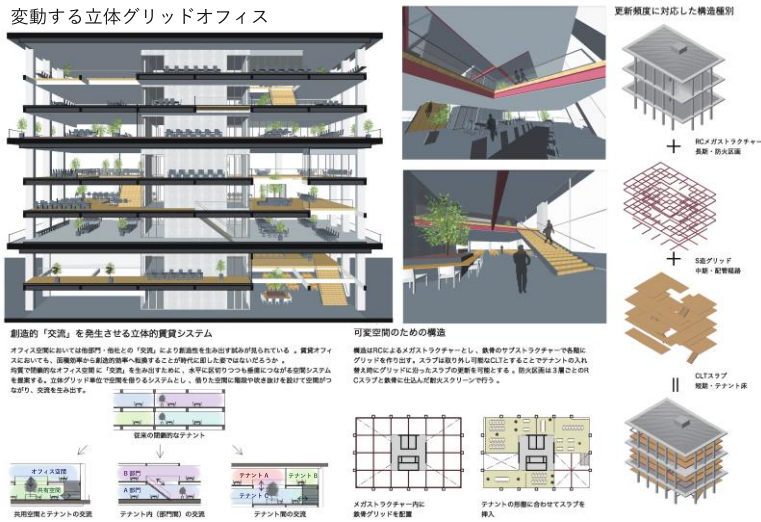
1) 北口貴是『OFFICE CONNECTED TO THE SKY』



選出理由

公園が斜めに貫通するように屋外ガーデンを設ける案について、これからのオフィスと公園の関係性の在り方や変化の可能性を、もっと広げていくとより面白くなる。視覚的にも公園と繋がり、公園の影響で事務室内部まで変わっていく可能性を感じた。

4) 中安翔太『変動する立体グリッドオフィス』



選出理由

変化する要素をCLTのみにせず、家具やその他の要素まで広げられると良いが、オフィスビルがその中に変動性や発展性を備えているところは働き方に流動性を持たせることができ、魅力的であった。

③ 出展者の感想

板谷様：今年度から個人事務所を開設したが、一般的な事務所は使ったことがないため、書けば書くほどこれで良いのかと不安になっていった。今回最優秀賞を取ることができて嬉しい。今後の原動力になれば良いと思っている。

前田様：去年2回目の製図試験で受かったが、設計とはいえ試験であるから仕方ない、と割り切って試験対策し、臨んでいた。晴れて一級建築士の試験に合格したのだから、建築士ではなく建築家となれるように頑張りたい。

北口様：今回の自分の提案は、あえて1級建築士の製図試験と同じルールでやるのが1級建築士になった責任であると思いつつとして挑んだため、後悔はない。

中安様：個別的な回答を考えることが普遍的なものになる、というところがとても響いた。一方で、事務所というビルディングタイプの課題に対しての自分なりの解決策が評価されたことは嬉しい。発表の場と畝森さんから沢山コメントをしていただいたことが経験になったので、これから頑張っていきたい。

上塘様：今回、自分は建築の空間を作ることを目的になってしまっていた。本来建築を作ること、その先どのような風景を見せたいのか、ビジョンを作ることが建築家像なのかなと感じた。

石河様：このコンペを見つけたのが期限直前で、出すか否か迷ったが、結局出して良かった。畝森さんの講評をいただけたことに加え、“なりたて建築士”である同志の考えと発想に触れることができ良かった。

【記録者後記】

基調講演では、今後建築家はどうかあるべきか、建築をどのように考えていくべきであるかについて

私自身も改めて考えるきっかけになるとともに、他者と協働することの新しい可能性や重要性、それにあたって大切にすべきこと等を聞くことができ、これからの他者との向き合い方を意識するきっかけにもなりました。建築家と百姓を“似たもの“とする捉え方は新鮮でありながらも確かに納得でき、この先も私の記憶に強く残るような気がします。今回の講評会では、新しい事務所のあり方について多様なアプローチの仕方を知ることができました。また、講評や質疑応答を通して、「事務所」の空間を考える前段階で、これからの人々の働き方や生活の仕方、環境の変化などのさまざまな背景を、より個別性、具体性を持たせて深掘りしていくことは、結果的に事務所の新しく多様な在り方の可能性を広げられる、ということが一貫して感じられました。このような考え方は、今後どんな建築に対しても従来の用途や機能に縛られすぎることなく心がけていきたいです。この1日を通して、非常に貴重な経験をすることができました。

最後になりましたが、ご講演いただいた畝森様、お忙しい中ご応募いただいた参加者の皆様に心より御礼申し上げます。